

けんりつなかい えんもとりようしゃ しぼうじあん かか けんしょう
 県立中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係る検証について

けんりつなかい えん もとりようしゃ れいわ ねん がつ か てんきよさき ちばけん
 県立中井やまゆり園の元利用者が、令和6年7月4日に転居先の千葉県

ちょうせいむら しぼう じあん ほうこく
 長生村で死亡した事案について報告する。

(1) たいおうけいか
 対応経過

ア けんしょう せっち
 検証チームの設置

もとりようしゃ かか けんない しえんきかん てんきよまえ せいかつ
 元利用者と関わりのある県内の支援機関とともに、転居前の生活や
 しえんじょうきょう ふ かえ ちいき せいかつ ささ ひつよう しえんとう
 支援状況を振り返り、地域での生活を支えるために必要な支援等に
 けんしょう なかい えんもとりようしゃ しぼうじあん かか
 ついて検証をするため、「中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係
 る検証チーム」（以下「検証チーム」という。）を設置した。

(ア) こうせいいん
 構成員

ざ ちょう さとう しょういち し こくがくいんだいがくめいよきょうじゅ
 （座長）佐藤 彰一氏（國學院大學名誉教授）

しえんきかん なかい えん しきゅうけつていじちたい そうだんしえんじぎょうしょ
 （支援機関）中井やまゆり園、支給決定自治体、相談支援事業所、

たんきにゅうしょじぎょうしょ しょうがい か
 短期入所事業所、障害サービス課

(イ) かいさいじょうきょう
 開催状況

だい かい れいわ ねん がつ にち か
 （第1回）令和6年8月27日（火）

ぎ だい けんしょう すす かた
 議題 ○ 検証チームの進め方

しえんきかん けんしょう
 ○ 支援機関ごとの検証

だい かい れいわ ねん がつ にち もく
(第2回) 令和6年9月12日 (木)

ぎ だい けんしょう すす かた
議 題 ○ 検証チームの進め方

○ しえんきかん けんしょう
支援機関ごとの検証

○ しえんきかん れんけい けんしょう
支援機関の連携についての検証

○ せいど し く けんしょう
制度や仕組みの検証

だい かい れいわ ねん がつ にち げつ
(第3回) 令和6年10月28日 (月)

ぎ だい な かい えんもとりようしゃ しぼうじあん かか けんしょう
議 題 ○ 中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係る検証チ

ーム ちゅうかんほうこくしょ あん
中間報告書 (案) について

○ こんご けんしょう
今後の検証について

だい かい れいわ ねん がつ にち げつ
(第4回) 令和7年3月17日 (月)

ぎ だい かんけいきかん およ こうはん けっか
議 題 ○ 関係機関へのヒアリング及び公判の結果について

○ さいしゅうほうこくしょ む ろんでんせいり
最終報告書に向けた論点整理

だい かい れいわ ねん がつ にち か
(第5回) 令和7年5月20日 (火)

ぎ だい けんしょう う ふ かえ
議 題 ○ これまでの検証を受けての振り返り

○ さいはつぼうしさく
再発防止策について

イ 中間報告について

第3回までの検証チームにおける議論について、これまでの対応に係る各支援機関の振り返りと同様の事案の発生を防ぐための各論点等を整理して、令和6年12月10日に中間報告書として公表した。

(2) 最終報告について

ア 検証の結果を踏まえた課題

(ア) 本人支援

入所施設は、意思決定支援等により元利用者が望む暮らしを把握し、そのうえで、本人が持つ可能性を引き出し、本人と一緒に、地域における希望のある暮らしを作っていくための支援を行うべきであるが、そうした役割を果たせていなかった。

(イ) 家族支援

- 関係機関は生活全般に支援が必要な家庭と認識していたが、関係機関の機械的な対応は、父母の負担を増加させ、孤立感を深めたと推察される。
- 地域生活が困難となった家庭に対し寄り添った支援を行う必要があった。

(ウ) 虐待対応

虐待リスクのある家庭に対し、措置入所といった踏み込んだ対応を検討する必要があった。

イ 再発防止策

(ア) 基本的な考え方

障害当事者とその家族を孤立させず、寄り添った対応を行うため、本人を中心に家族と共に関係機関が意思決定支援を行い、検討の場には本人と家族も参画する協働型のチーム支援を実践していく。

(イ) 当事者目線の支援

障害当事者本人の生き難さを理解し、本人の人生に共感して、本人が望む暮らしを実現できるよう本人との面接の機会を増やし、関係機関の話し合いの場に本人も含めるなど本人を中心にご家族も含めた意思決定支援に取り組む。

(ウ) 家族への寄り添い

- 生き難さを抱える障害当事者や家族に対して、家族負担が深刻な状況である場合には、本人を中心とした意思決定支援を行ったうえで、支援体制が整うまで短期入所、通過型の

にゅうしょ けんとう じっこう
入所を検討し、実行する。

- けん たんきにゅうしょ つうかかた にゅうしょ うけいれさき ちょうせい たいせい
県は、短期入所、通過型の入所の受入先を調整する体制の
こうちく む けんとう じっこう
構築に向けて検討し、実行する。

(エ) ぎやくたいたいおう めいかくか
虐待対応のスキームの明確化

- かぞく ぎやくたい う おも しょうがいとうじしゃ はっけん ばあい
家族から虐待を受けたと思われる障害当事者を発見した場合、
かんけいき かん しちょうそん つうほう
関係機関は市町村へ通報する。

- つうほう う しちょうそん そしきない ぎやくたい
通報を受けた市町村は、組織内で虐待によるリスクのアセス
メントを おこな うとともに、 しちょうそん そうだんし えんじぎょうしょ かんけい
機関が集まった話し合いの場を設定する。

- ば ぎやくたい そうごうてき
その場で、虐待によるリスクを総合的にアセスメントし、
せいめい きんきゅうじたい はんたん ばあい しちょうそん
生命にかかわるような緊急事態と判断される場合、市町村は
そ ち にゅうしょ きんきゅうひなんてき しせつにゅうしょ けんとう
措置入所による緊急避難的な施設入所を検討するとともに、
ちいきせいかつし えんきよてん きかんそうだんし えん たいおう ちょうせい
地域生活支援拠点や基幹相談支援センターでの対応を調整する。

かんけいき かん そ ち にゅうしょさき かくほ
なお、関係機関は、あらかじめ、措置入所先を確保しておく。

なか い えんもと りようしゃ し ぽう じ あん かか
中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係る

けんしょう ほうこく しょ
検 証 チーム 報告書

れい わ ねん がつ にち
令和 7 年 6 月 30 日

なか い えんもと りようしゃ し ぽう じ あん かか けんしょう
中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係る 検 証 チーム

もくじ 目次

I	はじめに	1
1	本報告書について	2
2	元利用者及びその家族について	2
II	中間報告書公表後の検証概要	
1	経過	4
2	関係機関へのヒアリング結果	4
3	父母へのヒアリング結果	7
4	父の公判結果（概要）	8
III	検証チームにおける議論	
1	支援機関に共通する検証	9
2	関係機関ごとの検証	10
3	制度や仕組みの検証	13
IV	検証結果を踏まえた課題	
1	本人支援	15
2	家族支援	15
3	虐待対応	15

4	<small>かんけいき かん れんけい</small> 関係機関の連携	16
---	---	----

V さいはつぼうしきく 再発防止策

1	<small>けんしょう おこな たいおう</small> 検証チームが行う対応	17
---	---	----

2	<small>こういきてき たいおう かだい</small> 広域的に対応すべき課題	20
---	---	----

VI おわりに 21

VII た その他

1	<small>けんしょう</small> 検証チームについて	23
---	-----------------------------------	----

2	<small>けい かおよ かんけいき かん かん よじょうきょう</small> 経過及び関係機関の関与状況	24
---	--	----

I はじめに

本事案は、親の高齢化に伴い、家庭での生活が困難となった重度の知的障害のある本人とその家族に生じた悲しい事案である。この検証作業を通じて明らかになったのは、重度知的障害のある方の地域生活を支える福祉の脆弱さと、それを必死に支えようとする家族の社会からの孤立である。

神奈川県（以下「県」という。）では、津久井やまゆり園で発生した痛ましい事件以降、県立障害者支援施設の検証を進めてきた。その過程で、施設内での長時間の居室施設や職員による虐待、長期入所による健康リスクの見過ごし等、入所者の命を脅かす実態が明らかとなった。

令和3年11月には「当事者目線の障がい福祉実現宣言」を打ち出し、「施設から地域へ」という方針のもと、令和5年12月には「県立障害者支援施設の方向性ビジョン」を策定し、具体的な改革に着手した。

しかし、施設縮小を進める一方で、重度知的障害のある方が尊厳を持ち、当然に享受すべき地域生活をどのように支えるか明確なビジョンが示されず、「施設へ入所させればよい」という言説を止める具体的な対策が不足していた。

本事案の検証作業を通じて、現状では、知的障害のある方が家族に世話をされ続けるか、本人の意思に関係なく施設に入所させられるかという二択しかなく、他の選択肢が極めて限られていることが浮き彫りにな

った。家族が支援に行き詰まった場合の選択肢は、短期入所による一時的な休息か、最終的に精神科病院への入院という二択しか現実的に用意されていなかったのである。

さらに、虐待のリスクは長年にわたり存在していたにもかかわらず、関係機関は「普段は子どもを思いやる優しい家族」ととらえるにとどまり、本人への支援を家庭任せにしてきた。その結果、「自分たちでどうにかするしかない」と家族が孤立し、厳しい状況に追い込まれる構造が生まれていた。

今回の検証を通じて見えてきたのは、これは単なる一家庭での特異な事案ではなく、重度の知的障害のある方とその家族が地域社会から排除され、孤立するという日本社会の現実である。家庭の高齢化が進む中、本人の意思決定支援を通じて、地域での生活をどのように支えるかが喫緊の課題となっている。

1 本報告書について

- 県立中井やまゆり園（以下「園」という。）の短期入所等を利用して、
男性（以下「元利用者」という。）が、令和6年7月4日に、
転居先の千葉県長生郡長生村で死亡する事案（以下「本事案」という。）が発生した。
- 元利用者及びその家族とは、園が平成10年から一時利用という形で関わりを開始し、平成16年には長期入所を受け入れ、退所後も再び短期入所で関わる等、20年以上にわたって関わりを続けていたが、
園は本事案の発生を防ぐことができなかった。
- また、元利用者及びその家族には、園だけでなく、様々な関係機関が関わっており、随所で家族からのSOSが発信されていたにもかかわらず、結果的に最悪の事態を招くこととなった。
- このことを受けて、元利用者のような重度の知的障害者を地域でどのように支えるべきなのか検討し、今後、同様の事案の発生を防ぐために、「中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係る検証チーム」（以下「検証チーム」という。）を令和6年8月23日に立ち上げ、
同年12月10日に中間報告書を公表した。
- 中間報告書公表以降、園以外の入所施設、千葉県長生郡長生村役場（以下「長生村」という。）、園元職員（ケースワーカー

一)、父母へのヒアリングを行い、このたび、課題と再発防止策を
まとめ、検証チーム報告書とした。

- なお、この検証は、特定の機関及び個人の責任の追求、関係者の処分を目的とするものではなく、本事案の発生に至った要因の検証等を通じて、同様の事案を防ぐことを目的としていることを申し添える。

2 元利用者及びその家族について

(1) 元利用者

元利用者は、療育手帳A1、身体障害者手帳I種2級を所持する最重度知的障害がある男性である。2歳から、障害児通所支援事業の利用を開始し、小学校から高等部までは養護学校へ通学していた。短期入所、生活介護といった障害福祉サービスを利用したり、園に入所していた時期もあったが、家族の希望により平成17年4月に退所している。直近では、園を含む複数の短期入所事業所を利用していたが、日中の通所系サービスは利用していなかった。

(2) 家族

元利用者は、父母、兄との4人家族である。兄は重度知的障害があり、障害福祉サービスを利用していたが、食事中の事故により

れいわ ねん な はは れいわ ねんころ たいちょう わる
令和3年に亡くなった。母が令和4年頃に体調が悪くなってからは、

もとりようしゃ しゅ かいごしゃ ちち
元利用者の主たる介護者は父のみとなっていた。

Ⅱ ちゅうかんほうこくしょうひょうご けんしょうがいよう 中間報告書公表後の検証概要

1 けいか 経過

れいわ ねん がつ にち 令和6年12月10日	ちゅうかんほうこくしょうひょう 中間報告書公表
れいわ ねん がつ にち 令和7年 1月29日	あつぎせいかえん 厚木精華園ヒアリング
がつ にち 1月31日	あいな えん 愛名やまゆり園ヒアリング
がつ にち 2月4日	ちょうせいむらやくば きかんそうだんしえん 長生村役場（基幹相談支援センター） ヒアリング
がつ にち 2月5日	グループホームけやきヒアリング
がつ にち 2月27日	ふ ぽ 父母ヒアリング
がつ にち 3月7日	えんもとしよくいん 園元職員ヒアリング
がつ にち 3月11日	いけんこうかんかいかいさい 意見交換会開催 けんしょう （検証チーム＋ヒアリング実施事業所）
がつ にち 3月12日	はんけつ 判決
がつ にち 3月17日	だい かいけんしょう かいさい 第4回検証チーム開催
がつ にち 5月20日	だい かいけんしょう かいさい 第5回検証チーム開催

2 かんけいきかん けっか 関係機関へのヒアリング結果

(1) えんいがい にゅうしょしせつとう 園以外の入所施設等

※ あつぎせいかえん あいな えん
厚木精華園、愛名やまゆり園、グループホームけやき

(ヒアリング結果のまとめ)

- いずれの施設も、父母の疲弊が強く、また、高齢のため、対応が困難だろうと感じていたが、受入れには至らなかった。
- 虐待リスクについて認識に差があった。
- 本事案を受け、重度の知的障害の方を地域で支えることが重要な課題と受け止め、重度訪問介護を利用し、グループホームでも対応できるよう取り組んだ事業所もあった。

あつぎせいけえん
＜厚木精華園＞

- ・ 施設見学の際に、家族の焦りや疲労感を強く感じた。
- ・ 緊急ケースとしての認識はあったが、その時の園の状況や介護度の高い中高齢の方が多い園の特性により、受入れが難しかった。
- ・ 在宅のサービスや家族が頼れる場所が必要だと感じている。
- ・ 日中の活動先として、生活介護事業所等で重度の方の受入れに特化した事業所があれば良いと感じている。
- ・ 移動支援等の事業所数が増える必要があると思うが、一方で人手不足の状況もある。今回の事案は、すべての問題が凝縮されていると感じている。

あいな えん
＜愛名やまゆり園＞

- ・ 兄弟二人とも重度の知的障害があり、自宅での生活が大変だと認識していた。父母も高齢であり、支援の困難さも感じていた。
- ・ 虐待リスクとしての認識や報告はなかった。短期入所時等で父母と関わる際にも、虐待を疑うような様子は見られなかった。
- ・ 定期的に短期入所利用をしていたが、感染症の流行に伴う受入れ制限により利用が途絶えた。
- ・ 令和5年に入所前提の短期入所の利用の問合せがあったが、

とうじ たいきじょうきょう しせつにゅうしょ むずか ほうこく つうじょう
当時の待機状況により施設入所は難しいと報告した。通常の

たんきにゅうしりよう じたく そうげい かぞく ふたん
短期入所利用については、自宅からの送迎が家族にとって負担だっ

たため、以降の申込みはなかった。

- ・ そうげい いどう しえんとう ひつよう
送迎や移動の支援等、サービスにつなぐためのサービスが必要と
かんが
考えている。

- ・ きんきゅうじ かなら う と せいど し く じぎょうしょ ひつよう かんが
緊急時に必ず受け止められる制度や仕組み、事業所が必要と考
えている。

<グループホームけやき>

- ・ ふ ぼ こうれい ひへい ようす み こま いんしょう
父母は高齢で疲弊している様子が見られ、かなり困っている印象
だった。

- ・ たいけんりよう う い もとりようしゃ ようす
グループホーム体験利用を受け入れたが、元利用者の様子により、
た りようしゃ しえん こんなん しょう と ちゅうたいしょ
他利用者の支援に困難さが生じたため、途中退所となった。

- ・ しょくいん はいち てあつ しえんりよく ちが かん
職員の配置が手厚くできれば支援力も違ったと感じている。

- ・ げんざい じゅうどほうもんかいご りよう たいおう かのう
現在は重度訪問介護を利用し、マンツーマンでの対応を可能とす
ることで、じゅうどちてきしょうがい かた う い と く
重度知的障害の方を受け入れられるよう取り組んでいる。

- ・ じゅうどちてきしょうがいしゃ うけい にっちゅうかつどうさき ひつよう かん
重度知的障害者を受入れできる日中活動先が必要だと感じてお
り、こんごじほうじん たけん せいかつかいごじぎょうしょ せっち
り、今後自法人で他県だが生活介護事業所を設置することとなった。

(2) 園元職員（ケースワーカー）

(ヒアリング結果のまとめ)

- 父母は高齢であり、疲労感から憔悴している印象を受け、また、父が元利用者に対して声を荒げる等、負担軽減の必要性は認識していたが、虐待リスクへの対応には至らなかった。
- 短期入所は、一定のルーティンに基づいた利用のほうで、元利用者及びその家族にとってわかりやすいと考えていたが、別の方法を考えても良かった。
- 入所について提案したこともあったが、その当時、父母は自宅と一緒に暮らしたいという希望があり、入所には至らなかった。
- 一生懸命に家庭で面倒をみている家族にとって、利用を断られると、自分たちで見ることができず、孤立してしまう。

- ・ 元利用者とその家族へは、複数年にわたった対応をする中で、いろいろと話を聞いたり、相談に乗ったりし、関係づくりを大切にしてきた。
- ・ 父母は疲れている様子があり、父は時折憔悴している印象だった。園の利用だけでは到底足りないとも感じていた。
- ・ 短期入所においては、一定のルーティンに基づいた利用のほうで、元利用者や家族にとってわかりやすいと考えていたが、

より希望に沿った、ルーティンに基づくだけではない方法があれば良かったと思う。

- ・ 長期入所について、令和2年の申込み以前、施設に空きが出た際等に父母に入所を働きかけたことがあったが、「まだ頑張れる」と父母より返答があり入所には至らなかった。もとより、積極的な入所の意向はなく、基本は自身で看たいとのことだった。
- ・ 入所以外の選択肢を一緒に考え、本人や家族に伝えていく関係性が必要だと感じている。
- ・ 施設に入ることだけでなく、本人や家族がどのように生活してきたのか、その生き方を選ばなければいけなかったのか等、正解や不正解で量らない眼差しが必要だと感じている。

(3) 長生村

(ヒアリング結果のまとめ)

- 長生村には施設や病院等の資源が少なく、受入れに不安を感じていた。実際に、入所施設をはじめ短期入所や在宅サービスには空きがなく、転居後のサービス利用は難しい状況だった。
- また、父母の気持ちの確認が十分できていなかった。さらに

は、虐待^{ぎゃくたい}リスクがあるとの認識^{にんしき}には至^{いた}らなかった。

- 小田原市役所^{おだわらしやくしょ}（以下「小田原市^{おだわらし}」という。）からの引継ぎ^{ひきつ}は、
書面^{しょめん}だけでなく、密^{みつ}に連絡^{れんらく}を取る必要^とがあった。

- ・ 転居^{てんきよ}前^{まえ}と転居^{てんきよ}後^ごに家庭訪問^{かていほうもん}の調整^{ちようせい}をしていたが、家族^{かぞく}の都合^{つごう}もあり、転居^{てんきよ}の10日後^{かごど}に1度^{いちど}しか家庭訪問^{かていほうもん}を行^{おこな}えなかった。
- ・ 長生村^{ちようせいむら}でも短期入所^{たんきにゆうしょ}の調整^{ちようせい}はできるが、施設^{しせつ}が少なく空^{すく}きがない状^{じようきよう}況^{むら}だった。村^{むら}でのサービス利用^{りよう}が決^きまるまでは、小田原市^{おだわらし}在住^{ざいじゅう}時^じと同^{どう}様に園^{えん}の利用^{りよう}について支給^{しきゅうけつ}決定^{けつぎ}できることを伝^{つた}えたが、利用^{りよう}することはなかった。
- ・ 日中活動^{にっちゅうかつどう}も短期入所^{たんきにゆうしょ}も長生村^{ちようせいむら}の施設^{しせつ}に空^あきがなく、すぐの利用^{りよう}は難^{むずか}しかった。村単体^{むらたんたい}では入所施設^{にゆうしょしせつ}はなく、圏域^{けんいき}での検^{けん}討^{とう}が必要^{ひつよう}だと認識^{にんしき}していた。
- ・ 家庭訪問^{かていほうもん}時^じ、母^{はは}からは話^{はなし}を聞^きいていたが、父^{ちち}の気持^きちを聞^きく機^き会^{かい}がなかった。父^{ちち}と母^{はは}の受^うけ止^とめは違^{ちが}った可^{かの}能^{のう}性^{せい}もあり、父^{ちち}の気持^きちをしっか^きりと聞^きけてい^{たい}れば、対^{ちが}応^{おう}は違^{ちが}っていたかもし^しれない。
- ・ 家庭訪問^{かていほうもん}や施設見学^{しせつけんがく}等^{とう}がき^もっか^もけで元利用^{もとりよう}者^{しゃ}の混^{こん}乱^{らん}を引^ひき起^{おこ}したり、それによる家^{かぞく}族^{ひへい}の疲^{しょう}弊^{しょう}が生^{かんが}じること^{かか}も考^{かんが}え、関^{かんが}わり^{かか}に消^{しょう}極^{きよく}的^{てき}になっ^ててしまっ^た。
- ・ 家庭訪問^{かていほうもん}時^じに父^ふ母^ぼが虐^{ぎゃく}待^{たい}をし^てい^る様^{よう}子^すはな^く、引^ひ継^{きつ}ぎ^{しりよう}の資^{しりよう}料^{りよう}

にも虐待^{ぎゃくたい}についての記載^{きさい}は令和^{れいわ}5年^{ねん}9月^{がつ}以降^{いこう}なかったため、
虐待^{ぎゃくたい}リスクとしての認識^{にんしき}はなかった。

3 父母^{ふぼ}へのヒアリング結果^{けっか}

(ヒアリング結果^{けっか}のまとめ)

- 障害^{しょうがい}のある子どもが2人^こ生まれた時点^{りう}で、周り^{じてん}からは見捨て^{まわ}られている。
- 父^{ちち}の姉弟^{してい}にはそれぞれの生活^{せいかつ}があり相談^{そうだん}できなかった。そのよ
うな状^{じょうきよう}況^{しせつ}では施設^{たよ}に頼^{たよ}るしかなかった。
- 本人^{ほんにん}がこれから先^{さき}どうなってしまうのか、不安^{ふあん}だった。
- 当時^{とうじ}の本人^{ほんにん}の状^{じょうたい}態^{たい}ではどこに行^いっても対応^{たいおう}が難^{むずか}しく、声^{こえ}をか
けてもどうしようもないと思^{おも}い諦^{あきら}め半分^{はんぶん}だったため、行政^{ぎょうせい}や
福祉^{ふくし}職^{しょく}員^{いん}には相談^{そうだん}自体^{じたい}しなかった。自分^{じぶん}たちでどうにかするし
かないと思^{おも}っていた。
- 園^{えん}に入^いれておけばよかったと思^{おも}い、悔^くやんだことがある。

- ・ 障害^{しょうがい}のある子どもが2人^こ生まれた時点^{りう}で、周り^{じてん}からは見捨て^{まわ}られている。転居^{てんきょ}後^ご、周^{しゅう}辺^{へん}には小^{ちい}さい子^こもおり、外^{そと}に出^だすわけ
にはいかないと感^{かん}じていた。
- ・ 新^{しん}型^{がた}コ^こロ^ろナ^なウ^うイ^いル^るス^す感^{かん}染^{せん}症^{しょう}で短^{たん}期^き利^り用^{よう}日^{にち}数^{すう}が2泊^{はく}3日^かの利^り用^{よう}
が1泊^{はく}2日^かになりがっかりした。

- 物の全部壊してしまうため、他の利用者がいる施設での対応は無理だと思った。
- 園の再入所について話したが、枠が埋まっていると言われた。
- 受診しても、体が曲がった原因や治し方の説明はなかった。
- 詳しく説明をしてくれる人が周りにおらず、自分たちには情報が入ってこなかった。
- 相談相手については、実際に自分がその立場になってみないとわからないと思っていた。
- 自分たちで何とかしなければならない、生きている間ずっと背負い続けなければいけないことだと考えていた。
- 当時の状態ではどこも受け入れてはくれないだろうと考えていた。声をかけてもどうしようもないと思い、諦めていた。

4 父の公判結果（概要）

（1）判決

令和7年3月12日に、父に対して懲役3年、執行猶予5年の判決が下された。

（2）理由

障害特性により障害者支援施設の介護職でさえその支援に困難

を感じる元利用者に対して、父母は、長年にわたり愛情を注いで

献身的に支えていた。父は、母の衰えを感じながら、養育の限界さ

を支援施設に訴えたものの、十分な福祉的支援を受けられなかつ

た状況は、父のみが責められる状況ではないことから、上記判決
となった。

Ⅲ 検 証 チームにおける議論

1 支援機関に共通する検証

(1) 本人への支援

関係機関は、詳細なアセスメントは行っておらず、「家庭で介護するのは大変な方」との認識は持っていたが、本人の人柄や、何に生き辛さや困難を抱え、その中でどのような夢や希望を持ち、望む暮らしは何なのか、本人を理解し、共感する関係性を持った当事者目線の支援を行えていなかった。

(2) 父の孤立

父は、日中の多くの時間を元利用者と二人でドライブをして過ごしており、特に母が体調を崩してからは、元利用者と二人の時間が増えていた。そのような状態は父にとって負担が大きかったものと推察される。

新型コロナウイルス感染症が流行する以前には、関係機関により、時折、家族を含めたカンファレンスが開催されていたが、父から入所希望が強くなった令和5年以降には元利用者及びその家族が出席した打合せは開催しておらず、家族には、入所できないなどの事実のみが伝えられることになった。

家庭での生活を支える在宅サービスを適切に実施するためには、

支援者と利用者との間での信頼関係が必要であるが、関係機関は、
元利用者及びその家族と信頼関係を十分に築くことができお
らず、父は孤立していったと考えられる。

(3) 家庭からのSOSへの不十分な対応

検証チームのメンバーは、父母から虐待があったとの認識も
持っていたが、組織内において然るべき共有が行われておらず、
担当者が変わる中で十分な引継ぎもされていなかったため、
虐待が家庭からのSOSであるという認識を十分に持てなかった。

そのため、元利用者の状態や家族の状況、これまでの支援
機関の関わり等を検証するといった虐待リスクに対する踏み込
んだ対応策の検討がなされなかった。

また、新規の入所相談や体験受入れ等で関わりのあった機関は、
父母からの虐待があったとの認識を持っていない機関もあった。

加えて、虐待の発生等のリスクを持つ家庭が転居する場合には、
十分な引継ぎが行われないことにより、虐待リスクの認識
低下等、危機的状況を招く可能性があることを関係機関は十分
に理解する必要があった。

小田原市、または相談支援事業所である（社福）永耕会相談支援
センターういず（以下「相談支援事業所ういず」という。）が中心

となつて、元利用者及びその家族に関わるすべての機関が共通
認識を持てるようアセスメント、情報共有を丁寧かつ十分に
行う必要があつた。

(4) 関係機関のつながりの弱さ

関係機関の情報共有が十分に行われていなかった背景には、
それぞれの機関が個々の業務に従つて、元利用者及びその家族に
対応しているのみで、関係機関同士が連携するための基盤となる
信頼関係は十分ではなかったことが推察される。日常的なコミ
ュニケーションや意思決定支援のプロセスを重ねることで、本人
を中心に家族も含め関係機関との信頼関係の構築が不可欠であ
る。
重度の障害を持つ方への障害福祉サービスが不足している
状況は、地域によって大きな差はないと推測されることから、
資源が十分でない可能性があることや、そのことから障害福祉
サービスの導入までに時間を要すること等の生活リスクを家族
と関係機関が共有する必要があつた。

2 関係機関ごとの検証

(1) 県・園

ア 寄り添う支援

園は、元利用者及びその家族の気持ちに十分に寄り添うことなく機械的な対応を行っており、例えば、短期入所の際に、規定体温を超えた場合に十分なクーリング時間を設けないまま受入れ不可の判断を行ったり、園内で怪我をした場合に入所期間を短縮して家族に迎えに来てもらう等の対応をしていた。

父は、公判の際に、「息子が暴れて警察を呼んでも、最終的には、自分が息子を連れて帰らざるを得ず、その繰り返しが非常に苦しい。」といった趣旨の発言をしており、誰にも頼ることのできなかった苦しみが想像される。

また、母は、相談支援事業所ういずとのやりとりの中で、「園から、新型コロナウイルス感染症の発生を理由に短期入所を断られたが、本当のことか疑っている。」といった発言をしていた。

しかし、園に対して、直接的にはこうした訴えはなったことから、本質的に家族と園が信頼関係を築くことができていたとはいえない状況であった。

イ 福祉的介入

園は、父との関わりで、「手を挙げることはあっても本人への想いは強い。顕著な暴力を振るような父親ではない。」との認識

も もとりようしゃ じょうたい かぞく じょうきょう しえんきかん
を持ち、元利用者の状態や家族の状況、これまでの支援機関
かか けんしょう ぎやくたい ふく
の関わりの検証といった虐待リスクも含めたアセスメントが
じゅうぶん ちょうせいむら てんきよご せいかつじょうきょう
十分にできていなかった。また、長生村への転居後、生活状況
かくにんとう たいおう おこな
の確認等の対応を行っていない。

ウ ケースワーク

えん かぞく もくてき たんきにゅうしょ ていきょう
園は、家族のレスパイトケアを目的とした短期入所を提供す
るのみで、もとりようしゃおよ かぞく たい いし けつていしえん おこな
等、本人が歩んできた人生や本人の希望、生きづらさ等を理解し
たうえでの せよ そ しえん
寄り添った支援ができていなかった。また、施設
りょうじ もとりようしゃ かてい せいかつ じしょうこうい ふ など
利用時、元利用者は家庭で生活するよりも自傷行為が増える等、
お つ しょうす えん かぞく にゅうしよそうだん
落ち着かない様子であった。そのほか、園は、家族から入所相談
う さい にゅうしよ ことわ あた かてい えいきょうとう
を受けた際に、入所を断ることで与える家庭への影響等、
じゅうぶん けんとう もとりようしゃ
十分な検討がなされていなかった。これらのことが、元利用者
およ かぞく しんらいかんけい きず しょういん
及びその家族との信頼関係を築くことができなかった要因とし
かんが
て考えられる。

くわ けん か たいおう ぎやくたいじあんとう かいぜん
加えて、県は、コロナ禍の対応や虐待事案等の改善のために
しんきにゅうしよ ていし はんだん さい もとりようしゃ はじ
新規入所を停止すると判断した際に、元利用者を始めとする
ざいたく せいかつ かた しえん じゅうぶん けんとう
在宅で生活している方への支援について、十分な検討をしてお
ひつよう たいおう しさく じゅうぶん と
らず、必要な対応、施策が十分に取られていなかった。

(2) 短期入所事業所

ア 寄り添う支援

元利用者の意思に反して短期入所を利用していた可能性があるが、短期入所事業所の支援によって、元利用者は落ち着いて過ごすことができおり、また、利用開始時の検温を行った際にも、クーリング時間を設ける等の対応を行い、元利用者を受け入れるための工夫を行っていた。

イ 福祉的介入

父の元利用者に対する虐待は、継続的に行われたものではないとの認識を持ち、危機感が低かった。

ウ ケースワーク

生活全般に支援が必要な家庭との認識を持ちながらも、短期入所以外のサービス利用を提案することができなかった。

(3) 相談支援事業所ういず

ア 寄り添う支援

家族の介護疲れによる元利用者の家庭生活のリスクについて認識を持っていたが、在宅サービスや通所利用につながらず、入所施設も見つからないまま、家族は疲弊していった。

転居先がどこであれ障害福祉サービス事業所や入所施設を

決めてい 難 しさは変わらないことや、新たな場所で手続きを行
う負担感やそれに 伴 う家庭の生活リスク等を、事前に、元利用者
及びその家族に説明する必要があった。

イ 福祉的介入

家庭の 状 況 を把握し関係機関と 共 有 していたが、関係機関
は同じ意識、目線を持つまでには至らなかった。

ウ ケースワーク

関係機関の中で、家族とのやり取りを 最 も 行 っており、家族
の希望を念頭に置きながら、在宅サービスの提案や通所先の見学、
体験に向けた調 整 を 行 っていた。

転居時には関係機関に必要な情 報 を伝え、引継ぎを 行 った。
その際、転居先の基幹相談支援センターからはサービスを組み立
てていくとの情 報 から、特に関与しなかったが、その後の 状 況
を確認すべきだった。

(4) 小田原市

ア 寄り添う支援

短期入 所 の支給決定を国が定める年間180日に変更している
が、虐待リスクを鑑 みて利用者の心身の 状 況 等を勘案したう
えでの支給決定を検 証、実施する必要があった。

イ 福祉的介入

小田原市は虐待通報を受けると事実確認を家族や関係機関に行い、入所施設やサービス調整をしていたが、本事業を防ぐことはできなかった。

また、施設入所やグループホームを目指していても、サービス利用につながらない中で、地域のネットワークで活用できるものがないか相談支援事業所や基幹相談センターと協議し、命の危険が生ずる恐れがある場合には措置も検討する必要があった。

ウ ケースワーク

小田原市は、虐待による家庭生活のリスクを元利用者に関係する全ての機関と共有するために中心的な役割を果たすとともに、担当者が変更する際には、虐待リスクの認識が適切に引き継がれない恐れがあることに留意し、定期的に情報を共有する必要があった。

3 制度や仕組みの検証

(1) 在宅サービス

各機関は、家庭での元利用者のリスク（虐待リスク含む）に対する認識を持って在宅生活を支えるための日中の通所先や移動支援の導入を検討した。

しかし、生活介護事業所の利用は対応が難しい等の理由で、2

か月程度で利用を終了し、移動支援は利用に至らなかった。

これらの背景には、行動面に支援が必要な方を十分に支援する

ための在宅サービスが充足していないことに加え、自宅に人が来

る訪問系サービスは家族による拒否が出やすく、信頼関係構築の

難しさがあった。また、一人の訪問では、元利用者のことを介護

することはできないと家族は考えたことから、導入には至らなかった。

虐待によるリスクが危機的状況に近づいている場合には、市

や基幹相談支援センターが中心となり、地域生活支援拠点、入所

施設及び精神科病院等全ての地域の社会資源が連携し、地域で支

えるためにどうすればよいか検討し、対応する必要があった。

現状、小田原市の自立支援協議会では虐待リスクのある家庭

への支援について検討はされておらず、地域生活支援拠点は

「療育手帳A1、A2を所持しているが、サービス利用につながって

いない方」を対象に、緊急時の受入れ等を行っているのみである。

元利用者及びその家族の状況を考えると、緊急的な対応が

必要な家庭は地域生活支援拠点の対象にすることや、自立支援協

議会に専門部会を設置し、虐待リスクにある家庭への対応を地域

の課題として検討する等の対応が必要であった。また、基幹相談

支援センターの関与を検討する必要があった。

(2) 施設入所

支援の前提として、意思決定支援を通じて障害のある本人が望む

支援を考 える必要があり、支援機関が家庭や地域での生活を支援す

ることが困難であることや家族を安心させることを理由に、長期の

施設入所を本人に押し付けることは人権擁護の観点から許される
ものでない。

本事案では、家族からの家庭での支援の困難な状況の訴えに対

し、関係機関は、長期の施設入所ありきで、グループホームを含め

た空き状況を確認し、対応可能な受入先を探しているのみであっ
た。

元利用者の状態や家族の状況、これまでの支援機関の関わりを

検証するといった、それぞれがアセスメントし、元利用者を中心

家族と共に、これからの元利用者の支援のあり方を検討する意思

決定支援の取組がなされていない。

上記を前提としたうえで、新型コロナウイルス感染症の流行や

不適切事案によって新規入所を止めている状況であっても、県は

入所期間を限定した通過型の入所受入れを検討すべきであった。

(3) 短期入所

えん たんきにゆうしょじぎょうしょ かぞく もくてき たんき
園や短期入所事業所は、家族のレスパイトケアを目的とした短期
にゆうしょ りよう にもとりようしゃしえん してん こべつしえんけいかく
入所の利用であっても、元利用者支援の視点から個別支援計画を
さくてい など たいおう ひつよう うえ かんせんしょうかくだいぼうしなど
策定する等の対応が必要であった。その上で、感染症拡大防止等の
ひじょうじ たいおう こんなん ばあい そうてい
非常時において、短期入所の対応が困難となった場合を想定し、
しょうがい ほんにん かぞく あた えいきょう じゅうぶん こうりょ うえ
障害のある本人やその家族に与える影響を十分に考慮した上で、
こ こ たいおう ていねい じゅうぶん けんとう ひつよう
個々の対応を丁寧かつ十分に検討する必要がある。

(4) ぎやくたいぼうし 虐待防止

おだわらし しょうがい ほんにん いのち まも かぞく かな せんたく
小田原市は、障害のある本人の命を守り、家族に悲しい選択をさ
せないためにも、ちようき しせつにゆうしょ ぜんてい いちじてき そち
長期の施設入所を前提としない一時的な措置
にゆうしょ けんとう ひつよう けん そち さき しんきにゆうしょ
入所を検討する必要があった。また、県は、措置先として、新規入所
ていしちゆう えん かのう にんしき
停止中であっても、園において可能であることを認識しておくべき
だった。

(5) た かんせんしょうりゅうこうじとうひじょうじ じゅんび その他（感染症流行時等非常時への準備）

しょうがい ほんにん かてい ちいき せいかつ ささ たんき
障害のある本人の家庭や地域での生活を支えるにあたって、短期
にゆうしょ ざいたく じゅうよう やくわり にな ていきてき つか
入所や在宅サービスは重要な役割を担っており、定期的に使えて
いたサービスがつか きかん みじか ほんにん
使えなくなることや期間が短くなることは本人や
かぞく じゅうだい
家族にとって重大なことである。

こんかい しんがた かんせんしょう しせつない しゅうだんかんせん ふせ
今回、新型コロナウイルス感染症の施設内での集団感染を防ぐ
もくてき たんきにゆうしょ ていしとう たいおう おこな けっかてき
ことを目的に短期入所の停止等の対応が行われたことが、結果的

に、家庭に負担を押し付け、虐待リスクを高めたことを重く受け止
め、非常時の対応を想定し、平時から指定基準に定められている BCP
の策定に取り組む必要がある。

IV 検 証 の 結 果 を 踏 ま え た 課 題

1 本人支援

- 入 所 施設は、意思決定支援等により元利用者が望む暮らしを把握し、その上で、本人が持つ可能性を引き出し、本人と一緒に、地域における希望のある暮らしを作っていくための支援を行うべきであるが、そうした役割を果たせていなかった。
- 関係機関においても、本人がどのような暮らしを望んでいたのかを語れない状況であった。意思決定支援が不足しており、本人が望む暮らしを中心に支援を構築していく必要があった。

2 家族支援

- 関係機関は生活全般に支援が必要な家庭と認識していたが、関係機関の対応は、父母の負担を増加させ、孤立感を深めたと推察される。地域生活が困難となった家庭に対し寄り添った支援を行う必要があった。
- 関係機関は、元利用者が地域での暮らしで何に困っていたのか、どのような暮らしを望んでいたかを語れておらず、家族が支援機関との信頼関係を構築することは難しかった。

- こうしたことが^{こりつかん}孤立感を生む^う背景^{はいけい}にあったと^{すいさつ}推察され、^{かんけいきかん}関係機関は、^{もとりようしゃ}元利用者を中心とし、^{かぞく}家族とともに^{ほんにん}本人の^{ちいきせいかつ}地域生活をどのよう^{ささ}に支えるか^{けんとう}検討する^{ひつよう}必要があった。

3 ^{ぎやくたいたいおう}虐待対応

- ^{かんけいきかん}関係機関は、^{もとりようしゃ}元利用者の^{じょうたい}状態や^{かぞく}家族の^{じょうきょう}状況、これまでの^{しえん}支援機関の^{きかん}関わりを^{かか}検証し、この^{けんしょう}家庭が^{かてい}追い込まれている^お状況等^こから^{じょうきょうとう}緊急度を^{きんきゅうど}判断する^{はんだん}といった^ふ踏み込んだ^こアセスメントができていなかった。
- この^{かてい}家庭における^{ぎやくたい}虐待リスクについて、それぞれの^{そしきない}組織内の^{じょうほうきょうゆう}情報共^{たんとうしゃへんこう}有や^{ひきつ}担当者^{ふじゅうぶん}変更による^{など}引継ぎの^{にんしき}不十分さ等による^{かいしょう}認識の^{ひつよう}ずれを^{ひつよう}解消する^{ひつよう}必要があった。
- ^{ぎやくたい}虐待リスクのある^{かてい}家庭に対し、^{たい}措置入^そ所^ちと^{にゅうしょ}いった^ふ踏み込んだ^こ対応を^{たいおう}検討する^{けんとう}必要があった。
- ^{ぎやくたい}虐待リスクのある^{かてい}家庭に対し、^{たい}小田原市は^{おだわらし}地域生活^{ちいきせいかつしえんきょてん}支援拠点や^{じりつしえんきょうぎかい}自立支援協議会^{かつよう}の^{ちいきしげん}活用により^{かくじゅう}地域資源^{ひつよう}を^{ひつよう}拡充する^{ひつよう}必要があった。
- また、^{けん}県は、^{いのち}命を守る^{まも}対応として、^{たいおう}緊急的^{きんきゅうてき}に^{しせつにゅうしょ}施設入^{しせつにゅうしょ}所による^{しえん}支援^{けんとう}を検討し、^{たいおう}対応する^{ひつよう}必要があった。

4 関係機関の連携

- 関係機関がそれぞれの業務を制度に基づいて実施していたが、
関係機関の機械的な対応が元利用者及びその家族を孤立させていた。
- 地域生活を支えるという共通の役割のもとで、元利用者を中心
に家族と共に関係機関が意思決定支援を行い、本人と家族、関係
機関が、地域とともに、本人が望む生活を実現できるよう取り組む
必要があった。

V さいはつぼうしきく 再発防止策

1 けんしょう おこな たいおう 検証チームが行う対応

(1) きほんてき かんが かつ 基本的な考え方

ひとひとり いのち うば けっか じゅうだい いのち うば こうい
一人の命が奪われた結果は重大であり、命を奪う行為はどの
じじょう けつ ゆる ほんじあん
ような事情があっても決して許されることではない。しかし、本事業
せきにん ちち お かんけいきかん もとりようしゃ いし
の責任は、父だけが負うものではなく、関係機関が、元利用者の意思
けつていしえん かぞく よ そ たいおう じゅうぶん かつてい こま
決定支援、家族への寄り添った対応が十分でなく、この家庭が困つ
とき たす もと かんけい こうちく
た時に助けを求めることができる関係が構築できなかったことに
もんだい かんけいきかん もとりようしゃおよ かぞく こりつ
問題がある。関係機関は、元利用者及びその家族を孤立させてしまつ
しゃかいてき ぎやくたい
たこと、また、このことは、社会的なネグレクト（虐待）であつた
してき おも う とめ さいはつぼうし と
と指摘されてもおかしくないことと重く受け止め、再発防止に取り
く
組まなければならない。

けん どうじしゃめせん しょうがいふくし すいしん れいわ ねん
県は、当事者目線の障害福祉を推進していくために、令和5年4
がつ にち かながわけんとうじしゃめせん しょうがいふくしすいしんじょうれい い
月1日に『神奈川県当事者目線の障害福祉推進条例～ともに生き
しゃかい めざ しこう しょうがいしゃ しえん きほん
る社会を目指して～』を施行している。障害者の支援は、この基本
りねん もと かぞく いこう しえんしゃ はんだん しょうがい
理念に基づき、家族の意向や支援者の判断ではなく、障害のある
ほんにん めせん た しえん ぜんてい
本人の目線に立った支援を前提としなければならない。

かくきかん しえん あ ひとり こじん みずか やくわり
そして、各機関、支援に当たる一人ひとりの個人が自らの役割と
せきにん にんしき かつてい ちいきしゃかい こりつ しょうがい ほんにん
責任を認識し、家庭を地域社会から孤立させず、障害のある本人と

その家族に寄り添った対応を行わなければならない。

そのためには、本人を中心に家族と共に関係機関が意思決定支援

を行い、検討の場には本人と家族も参画する協働型のチーム支援

を実践していかなければならない。

(2) 具体的な対応

ア 当事者目線の支援

○ 元利用者は家族や支援者が対応に苦慮する行動を見せてい

たが、その背景には元利用者が生き難さを抱え、そのような

行動を取らざるを得ない状況があったと推察される。

○ そのような障害当事者に対して、本人の生き難さを理解し、

本人の人生に共感して、本人が望む暮らしを実現できるよう

本人との面接の機会を増やし、関係機関の話し合いの場に本人も

含める等本人を中心にご家族も含めた意思決定支援に取り組む。

イ 家族への寄り添い

○ 本事案は、元利用者の生き難さを誰も理解することなく、地

域で生活しながらも、孤立した家庭の中で発生したと考えられる。

○ このような生き難さを抱える障害当事者や家族に対して、

支援者ができることはなにか、当事者の目線に立って、

かくしえんしゃ きかん かんが つづ も しげん
各支援者・機関は考え続け、それぞれが持つ資源やノウハウ

さいだいげんはつき いっぽふ だ しえん ていきょう
を最大限発揮して(あるいは一歩踏み出した)支援を提供し、

しょうがいとうじしゃ かぞく よ そ つづ かくご も たいおう
障害当事者や家族に寄り添い続ける覚悟を持ち、対応する。

○ はな あ けっか かぞく せつめい はな あ
話し合い結果のみを家族に説明するのではなく、話し合いの

ば かぞく さんか けつろん はいけい ていねい せつめい
場に家族に参加してもらい、結論にある背景まで丁寧な説明を

おこな かぞく なつとく しえんたいせい こうちく
行い、家族が納得できる支援体制を構築する。

○ ざいたく せいかつ かぞくふたん しんこく じょうきょう ばあい
在宅での生活では、家族負担が深刻な状況である場合には、

ほんにん ちゅうしん い し けつてい しえん おこな しえんたいせい
本人を中心とした意思決定支援を行ったうえで、支援体制が

ととの たんきにゅうしょ つうかかた にゅうしょ けんとう じっこう
整うまで短期入所、通過型の入所を検討し、実行する。

○ けん たんきにゅうしょ つうかかた にゅうしょ うけいれさき ちょうせい たいせい
県は、短期入所、通過型の入所の受入先を調整する体制

こうちく む けんとう じっこう
の構築に向けて検討し、実行する。

ウ ぎやくたいたいおう めいかくか 虐待対応のスキームの明確化

○ かぞく ぎやくたい う おも しょうがいしゃ はっけん ばあい
家族から虐待を受けたと思われる障害者を発見した場合、

かんけいき かん しちょうそん つうほう
関係機関は市町村へ通報する。

○ つうほう う しちょうそん そしきない ぎやくたい
通報を受けた市町村は、組織内で虐待によるリスクのアセ

スメントをおこな しちょうそん そうだんしえんじぎょうしょ
スメントを行うとともに、市町村または相談支援事業所は、

かんけいき かん あつ はな あ ば せつてい
関係機関が集まった話し合いの場を設定する。

○ ば ぎやくたい そうごうてき
その場で、虐待によるリスクを総合的にアセスメントし、

いのち かか きんきゅうじたい はんだん ばあい しちょうそん そち
命に関わるような緊急事態と判断される場合、市町村は措置

入所による緊急避難的な施設入所を検討するとともに、

地域生活支援拠点や基幹相談支援センターでの対応を調整す

る。なお、関係機関は、あらかじめ、措置入所先を確保してお

○ 措置入所を受け入れた施設において、改めて、本人の状態

について再アセスメントを行う。また、市町村や相談支援

事業所は、地域生活に必要な日中活動の場の確保等本人の暮

らしづくりに向けた支援の立て直しを行う。

○ 以上の対応を行うに当たっては、本人を中心に関係機関も

含めた意思決定支援を行うとともに、意思決定支援に基づき

地域生活に必要な資源の充実を図る。

エ 関係機関の連携による隙間を生まないケースワーク

(県・園の対応)

・ 短期入所を断らざるを得ない場合や長期入所先が見つ

からない場合には、相談支援事業所のみが対応するのではな

く、断った園や他の入所施設は、その後の生活をフォロー

するとともに、関係機関と協力しながら、電話連絡、家庭

訪問等を行う等、現状把握を行いながら園、他の入所

施設としてできることを検討し、対応を継続する。

- ・ 虐待リスクのある家庭に対応する場合は、本人の状況や家族の状況についてのアセスメントやこれまでの関わり
の検証を行い、家庭への支援のあり方を組織として検討し、
対応する体制を構築する。
- ・ 市町村が措置入所を検討している場合、障害のある本人
の命を守るべき対応として、園や他の入所施設は地域生活
の立て直しに向けた通過型の入所支援を実施するとともに、
県は、園や他の入所施設、関係機関の対応が十分に行える
よう必要なサポートを実施する。

（短期事業所）

- ・ 虐待リスクがある場合には、組織内の全ての職員が同様
の認識を持ち、対応ができるような体制を構築する。
- ・ また、事業所の実情から受入れが困難な場合であっても、
命を守るべき対応として、事業所としてできないことがない
か検討を継続する。

（相談支援事業所ういず）

- ・ 障害のある本人を中心に、本人と家族から希望を聞く。
- ・ 虐待を含む生活上にリスクを抱えている家庭を支援す
る場合には、1人の担当者や1つの事業所で対応していくこ

とには限界があるため、小田原市を中心とした関係機関と

密に情報共有を行い、一事業所で抱え込まずに対応する。

（小田原市）

- ・ 虐待リスクのあるケースに迅速に対応し、終結に至るまで関係機関と連携し、本人と家族に寄り添いながら支援に取り組む。
- ・ 障害のある本人が、望む暮らしを実現できるよう、相談支援事業所や委託相談支援事業所、基幹相談支援センターと日頃から連携を図り、適切な支援体制を構築するとともに、特に虐待リスクのある家庭への情報共有のあり方や支援方法を新たに検討し、対応する。
- ・ 具体的には、地域生活支援拠点の対象者に虐待リスクのあるケースを含めることを検討し、登録事業所の拡大に努めることに加えて、圏域、県の自立支援協議会と連携も図りながら地域課題の共有及び課題解決に取り組む。

2 広域的に対応すべき課題

- 市町村は、緊急的な対応が必要な家庭がないか基幹相談支援センターや相談支援事業所への調査等を行い、継続的に把握し、

たいおう しゅたいてき けんとう たいせい こうちく ひつよう
対応を主体的に検討する体制の構築が必要である。また、自立

しえんきょうぎかい かつよう こういきてき たいせいかうちく はか
支援協議会を活用しながら、広域的な体制構築を図っていく。

○ その中で、現在のサービス体制や地域の実情により、在宅での

せいかつ いのち まも たいおう こんなん ばあい きかんそうだんしえん
生活では、命を守るべき対応が困難な場合には、基幹相談支援セン

ちいきせいかつしえんきょてん きょうぎ おこな え
ター、地域生活支援拠点による協議を行いながら、やむを得ない

ばあい そち たんきにゅうしょ つうかかた にゅうしょ けんとう
場合には措置による短期入所、通過型の入所を検討する。

○ 県は、市町村が対応を行うための体制構築を支援し、措置による

たんきにゅうしょ つうかかた にゅうしょ うけいれさき ちょうせい たいせい こうちく
短期入所、通過型の入所の受入先を調整できる体制を構築する

ひつよう
必要がある。

Ⅵ おわりに～今後の検討に向けて～

ほんけんしょうさぎょう つう かんけいきかん もんだい ふ かえ さいはつぼうしさく
本検証作業を通じて、関係機関が問題を振り返り、再発防止策をまと
めた。しかし、これによって重度の知的障害のある方の地域生活を支え
る福祉の脆弱さや、家族の孤立が解決されたわけではない。

こんご かだい い か てん じゅうよう
今後の課題として、以下の点が重要となる。

だいいち しせつ ぎやくもど ふせ ひつよう こんかい じあん う じゅうど
第一に、「施設への逆戻り」を防ぐ必要がある。今回の事案を受け、「重度
の知的障害のある人は施設に入所させるしかない」という考え方が広
がり、障害者を地域から排除する動きが生じることは避けねばならない。

しせつ はい ほんにん ちいきしゃかい こ はな かぞく そんざい
施設に入りたい本人や、地域社会から子どもを離したい家族は存在しない。

かんけいきかん ふ かえ しせつ ちょうきにゅうしょ もと こえ じゅうど
関係機関の振り返りでは、施設への長期入所を求める声があった。重度

ちてきしょうがいしゃ かぞく はじ ちいきじゅうみん み
の知的障害者とその家族が初めから地域住民として見られず、「やっか

いもの」として扱われていることが問題である。この問題は重度の知的

しょうがいしゃ かぞく もんだい しえんきかん ふく ちいきしゃかい かた
障害者とその家族の問題ではなく、支援機関を含めた地域社会のあり方

さいにんしき ひつよう
にあることを再認識する必要がある。

だいに ほんにん ぎやくたいたいおう てつてい こんかい ほんにん かぞく いっしょ かた よ
第二に、本人への虐待対応を徹底。今回、「本人は家族と一緒にの方が良

おも りゅう とうめん ようす みまも はんだん
いと思われる」という理由で「当面、様子を見守る」と判断された。ここ

い しけつていしえん りかいふそく い しけつていしえん ほんにん い
には意思決定支援についての理解不足がある。意思決定支援は本人が言っ

たんじゅん う の おも
ていることを単純に鵜呑みにするのではなく、なぜそう思うのかのアセ

ひつよう ぎやくたいじあん ほんにん あんぜんかくほ
スメントが必要である。また、虐待事案は、本人の安全確保だけでなく、

かぞくぜんたい しえん ひつよう
家族全体が支援を必要としていることを認識し、家族を加害者としてのみ

とら たいおう おこな ふ かけつ くわ ぎやくたい にんしき
捉えずに対応を行 うことが不可欠である。加えて、虐待リスクを認識し

ているのであれば、たん いえ かえ かてい しえん い ひつよう
単に家に帰すだけでなく、家庭へ支援を入れる必要が

ある。ぶんり ふく ちいき しえん かんけいしゃ けんとう ひつよう ちいき
分離も含めた地域支援、これを関係者が検討する必要がある。地域

における きんきゅうたいおう たいせい ちいきせいかつしえんきょてん せいび きゅうむ
緊急対応の体制として、地域生活支援拠点の整備が急務である。

だいさん ほんにん ちいきせいかつしえん もくてき きかんげんてい しせつにゆうしよしえん
第三に、本人の地域生活支援を目的とした期間限定の施設入所支援の

かくりつ こんかい かぞく じぶん あきら
確立。今回、家族からは「自分たちでどうにかするしかない」という諦め

こえ あ げんじょう かぞく もくてき
の声が上がっている。現状では、家族のレスパイトケアを目的とした

たん きにゆうしよ ほんにん かくり ちようきにゆうしよ にしやたくいつ かぞく お
「短期入所」と、本人を隔離する「長期入所」の二者択一が家族を追い

こ じゅうど ちてきしょうがいしゃしえん じっせき しせつ きかん き
込んでいる。重度の知的障害者支援に実績のある施設に期間を決めて

にゆうしよ ほんにん とくせい こんなん ひょうか しえん た なお と く おこな
入所し、本人の特性や困難を評価し、支援を立て直す取り組みを行 うこ

とが じゅうよう どうじ かぞく そうだんしえん ちいき しえん かか じんざい
重要だ。同時に、家族への相談支援や地域での支援に関わる人材が

れんけい ほんにん しせつ かん しえんたいせい ととの つうかかたしえん じんそく
連携し、本人が施設にいる間に支援体制を整 える「通過型支援」を迅速に

じっし ひつよう
実施する必要がある。

だいよん ほんにん ちゅうしん い し けっていしえん てつてい ほんにん とくせい こんなん
第四に、本人を中心とした意思決定支援の徹底。本人の特性や困難を

ひょうか り かい のぞ く かんが じつげん しえん
評価・理解し、望む暮らしをともに 考え、実現するための支援チームが

ひつよう じゅうらい たてわ しえんたいせい かぞく こりつ ほんにん
必要である。従 来の縦割りの支援体制ではなく、家族を孤立させず、本人

せいかつ なに はな あ たが たす あ しんらいかんけい きず
の生活について何でも話し合い、お互いが助け合える信頼関係を築く、

かぞく さんかく きょうどうがた しえん もと
家族も参画する協働型の支援チームが求められる。

だいご ちいき せいかつ ささ ぐたいさく すいしん じりつしえんきょうぎかい かつようとう
第五に、地域での生活を支える具体策の推進。自立支援協議会の活用等
つう もと にちゅう かつどうきょてん せいび そくしん
を通じ、求められるグループホームや日中の活動拠点の整備を促進する
じゅうよう かてい ほうもんかいご いどうしえん じゅうじつ む
ことが重要である。また、家庭への訪問介護や移動支援の充実に向けた
と く すす はたら じんざい いくせい けいかくてき おこな ひつよう
取り組みを進め、そこで働く人材の育成を計画的に行う必要がある。
ぎょうせい みんかん いったい ちょうきてきしてん も と く
行政と民間が一体となり、長期的視点を持って取り組んでいかなければ
ならない。
こんかい けんしょう つう み じけん いちかてい とくい
今回の検証を通じて見えてきたのは、この事件は、一家庭での特異な
じあん じゅうど ちてきしょうがい かた かぞく ちいきしゃかい はいじょ
事案ではなく、重度の知的障害のある方とその家族が地域社会から排除
こりつ にほんしゃかい げんじつ かな じあん けいけん
され、孤立するという日本社会の現実である。こうした悲しい事案を経験
かながわけん ぜんこく さきが てつてい しょうがいふくしせさく かいかく
した神奈川県だからこそ、全国に先駆けて、徹底した障害福祉施策の改革
と く
に取り組んでいただきたい。

VII その他^た

1 検証^{けんしょう}チームについて

(1) メンバー

がくしきけいけんしゃ だいさんしゃ 学識経験者 (第三者)	こくがくいんだいがく さとう しょういちめい よきょうじゅ 國學院大学 佐藤 彰 一名誉教授
しきゆうけつていじちたい 支給決定自治体	おだわらしふくしけんこうしぶしょう ふくしか 小田原市福祉健康部 障がい福祉課
そうだんしえんじぎょうしょ 相談支援事業所	しゃふく えいこうかい そうだんしえん (社福)永耕会 相談支援センターういず
たんきにゆうしょじぎょうしょ 短期入所事業所	じぎょうしょめいひこうひょう (事業所名非公表)
けん 県	ふくしこ きょくふくしぶしょうがい 福祉子どもみらい局 福祉部障害サービス か 課 なかい えん 中井やまゆり園

(2) 開催^{かいさいじょうきょう}状況

だい かい かいさいび れいわ ねん がつ にち か
[第1回] 開催日 令和6年8月27日 (火)

- ぎ だい
議 題
- けんしょう すす かた
・ 検証チームの進め方
 - しえんきかん けんしょう
・ 支援機関ごとの検証
 - じかい かいぎ む
・ 次回の会議に向けて

だい かい かいさいび れいわ ねん がつ にち もく
[第2回] 開催日 令和6年9月12日 (木)

- ぎ だい
議 題
- けんしょう すす かた
・ 検証チームの進め方
 - しえんきかん けんしょう
・ 支援機関ごとの検証
 - しえんきかん れんけい けんしょう
・ 支援機関の連携についての検証

- ・ せいど し く けんしょう
制度や仕組みの検証

[第3回] かいさいび 開催日 れいわ ねん がつ にち げつ
令和6年10月28日（月）

- ぎ だい
議 題
- ・ な かい えんもとりようしゃ しぼう じあん かか
中井やまゆり園元利用者の死亡事案に係る

けんしょう ちゅうかんほうこくしょ あん
検証チーム中間報告書（案）について

- ・ こんご けんしょう
今後の検証について

[第4回] かいさいび 開催日 れいわ ねん がつ にち げつ
令和7年3月17日（月）

- ぎ だい
議 題
- ・ かんけいき かん およ こうはん けっ か
関係機関へのヒアリング及び公判の結果に
ついて

- ・ さいしゅうほうこくしょ む ろんでんせいり
最終報告書に向けた論点整理

[第5回] かいさいび 開催日 れいわ ねん がつ にち か
令和7年5月20日（火）

- ぎ だい
議 題
- ・ さいしゅうほうこくあん
最終報告案について

2 経過及び関係機関の関与状況

ねんがつひ 年月日	かぞく かんよ じょうきょう 家族・関与の状況	
S52年	あにしゅつせい 兄出生	
S54年	もとりようしや 元利用者 しゅつせい 出生	
S61年-H10年		しょうがっこう ようごがっこう げんしえんがっこう つうがく 小学校から養護学校（現支援学校）に通学 あか 明るくやんちゃな性格をしており、からだ うご 身体が動くことが好 きで、小 中 学生のところにはかけっこが速く、ラジオで聞く はこねえきでん たのしみ 箱根駅伝を楽しみにしていた。いしかわ 石川さゆりやテレサ・テンの この C Dを好んで聞いていた。
H10年 4月	せいかつ かいご 生活 介護 りようかいし 利用開始	ようごがっこう げんしえんがっこう そつぎょう ともな せいかつかい ごじぎょうしよ 養護学校（現支援学校）卒業に伴い、生活介護事業所の 利用を開始
		ふくやくかいし 服薬開始するが、自宅では安定した服薬ができず。
がつ 10月	えん 園 を 一時 りよう 利用	とうじ かぞく しょうらい きょうだい しせつりよう かんが 当時から家族は「将来は兄弟で施設利用を考えている」 はな と話していた。いこう かぞく かんこんそうさい など りゆう 以降、家族の冠婚葬祭やレスパイト等の理由 で、園を不定期に一時利用。
H12	せいかつ かいごしゅう 生活 介護週 5回通所	そうげい ちち ばあい くるま はは ばあい でんしゃ つか むか 送迎は父の場合は車、母の場合は電車を使っている。迎え ちち ばあい おお いえ なか は父の場合が多い。「家の中ではテレビを見ていることが多い。 やす ひ は、さんぽ か がいいしゅつ 休みの日は、散歩を兼ねて外出することが多くあまり いえ 家にはいない。
H13		ちち たいちよう あに け が かんご えん いちじりよう 父の体調や兄の怪我の看護のために園を一時利用。
ねん がつ H15年10月 ～同年12月	えん しゅうちゅう 園で集中 りよういく 療育	えん しゅうちゅうりよういく う えん しんりようじょ せいしんかびょういん 園において集中療育を受け、園診療所と精神科病院と じょうほうきょうゆう ふくやくちようせい おこな しゅうちゅうりよういくちゅう 情報共有し服薬調整を行う。集中療育中に、 じょうはんしん かたむ など じょうたい へんか 上半身の傾き等の状態の変化。
ねん がつ H16年 1月	もとりようしや あに 元利用者、兄 たいじゅう の体重が げんしょう 減少	ちち きょうだい かいご ひとり おこな げんいん 父が兄弟の介護を一人で行っていることが原因である かのうせい 可能性がある。
がつ 7月	えんにゅうしよ 園入所	じょうきじょうきょう くわ せいしんか ていきでき つういん 上記状況に加え、精神科に定期的に通院していない じょうきょう ふ どうねん がつ かんけいき かん はたら えん 状況も踏まえ、同年7月、関係機関の働きかけにより園 ちようきにゅうしよかいし に長期入所開始
		ちようきにゅうしよ かん ほんにん こうせいしんかくすり しんたいできえきょうおよ 長期入所の間、本人の抗精神科薬による身体的影響及び せいしんかくすり ちようせい えんしんりようじょ せいしんかびょういんとう 精神科薬の調整について園診療所と精神科病院等との かん じょうほうきょうゆう いりようめん たいおう おこな 間で、情報共有がなされ、医療面での対応を行った。
がつ 10月		えん にゅうしよちゅう ほんにん たいじゅう お しせつにゅうしよ 園に入所中に本人の体重が落ちたこと、施設入所して いは せいしんじょうきょうとう かぞく たいしよ そうだん いることによる母の精神状況等から家族より退所の相談

H17年 4月	園退所	「病 状 も治りそうもなく、あとどれくらい一緒に入れるか分からない、本人を家庭で見たい」と家族から訴えがあり、園を退所。日中は母が自身で見る旨の発言あり。
		退所後、園職員等が家庭訪問した際、体重の減少、身体機能の低下が見られ、立つことのできない状態
5月	日帰りの短期入所 実施（週1回）	
	ケース会議	虐待のリスクがあれば、措置も検討してほしいことを園から小田原市に要請した。
H18年 1月	虐待情報 ①	園の日帰り短期入所の際、虐待が疑われる痕跡を発見し、小田原市へ報告。小田原市は、父親から「本人が眠らない日が続き、ついやってしまった」と状況を確認。短期入所の利用を促し、短期入所先を探すが見つからず。日中活動の場を探すこととなった。
H19年 10月	虐待情報 ②	父母より虐待を疑わせると話あり。園の短期入所実施。また、精神科病院・園の連携を確認。 小田原市は精神科病院への入院調整を図るが、入院の効果はないと医師の所見あり。
11月	ケース会議 宿泊短期入所	ケース会議により父母より毎週の2泊短期入所希望があり、園の状況から1泊と2泊を交互に宿泊短期入所を実施。
H20年		相談支援事業所が在宅支援訪問養育等指導事業として、月1回の家庭訪問を開始。H25年度まで実施。
4月	短期事業所の利用開始	園に加えて、短期事業所の利用を開始。
H25年 5月	虐待情報 ④	園の短期入所利用時、虐待を疑わせる痕跡を確認。小田原市に通報。家では父がほぼ対応しており、睡眠不足。平日の通所先の希望あり。関係機関で、今後入所に向けて検討していくことを確認するとともに、施設の短期入所中の様子として、睡眠リズムが不安定であることを共有。
H25年 7月	ケース会議	家族との関係性に考慮しながら、入所に向けて家族と調整することを確認。虐待に関する情報共有を行った。

ねん H27年	がつ 5月	10 日間 の 短期入所	ようす 様子として「他利用者にあまり干渉されない環境のため か、以前と比べ、表情が豊かでのびのび過ごしている」と の園の記録あり。
	がつ 9月	10 日間 の 短期入所	
ねん H27年	がつ 12月	兄の短期 入所を園で 開始	ざいたくせいかつ さき もくてき あに 在宅生活を支える目的で、兄についても園で短期入所の 利用開始（月1回）
ねん H29年	がつ 2月	虐待情報 ⑤	たんきにゅうしりょうじ ぎやくたい うたが こんせき ちち かくにん 短期入所利用時に虐待を疑わせる痕跡があり、父に確認 すると「手をあげちゃった」等と話していたと、園から おだわらし れんらく おだわらし かていほうもんじつし にゅうしよ む 小田原市に連絡。小田原市で家庭訪問実施。入所に向け、 ふくすう にゅうしよしせつ けんがく 複数の入所施設を見学。 りょうしん かんけいしや かいぎ かいさい こんご しえん 両親と関係者による会議を開催し、今後の支援について けんとう おこな 検討を行った。
ねん H29年	がつ 5月	通所先が見 つからない。	せいかつかい ごじぎょうしよ しゅう かいつうしよ かいし 生活介護事業所へ週1回通所を開始するが、自宅での様子 が落ち着きがなくなり、継続できず。
	がつ 6月		あし しょうがい しんたいしやうがいしやてちやうこうふ 足の障害により身体障害者手帳交付。
ねん H31年	がつ 1月	家族からの 訴え①	ちち 父から「そろそろ無理だと思っている」、「精神的に持たな い」との話あり、関係機関で、園を含めた近隣施設に入所 もうしこ おこな ほうこう かくにん じっさい てつづ おこな 申込みを行う方向で確認するが、実際には手続きは行わ れていない。父は入所希望があるが、母は入所に否定的。
	がつ 11月	短期入所の 支給決定量 変更	たんきにゅうしよ しきゅうけつていにつさう にち にち へんこう 短期入所の支給決定日数が20日から15日に変更。
ねん R2年	がつ 4月	短期入所 停止	しんがた かんせんしやう えいきやう えん たんきにゅうしよ 新型コロナウイルス感染症の影響により、園の短期入所 停止
	がつ 10月	家族からの 訴え②	がつころ 「9月頃からイライラしどうしで、TV（を）今年に入り4台 だめにして、外には出て行ってしまい警察に2回保護され たり夜は寝ず、寝ないのが一番辛い」といった理由により園 にゅうしよもうしこ しんきにゅうしよしや き に入所申込み。すでに新規入所者は決まっていることか ら、入所に至らず。 にゅうしよ いた 生活介護事業所の見学実施。
	がつ 10月	虐待情報 ⑥	そうだんしえんじぎょうしよ めんだん ちち ほんにん ころ じぶん 相談支援事業所との面談において、父は「本人を殺して自分 が懲役に服すことで解決する。」との発言あり、また、母か らも虐待を疑わせる行動があったとの情報あり。 ぎやくたい うたが こうどう じょうほう 緊急的な対応が必要との認識あり。
	がつ 11月	虐待情報	ぎやくたい つうほう う 虐待の通報を受けて、関係者で会議を実施。

	⑦	<p>父母が本人の対応に疲弊しており、手を上げてしまうこともあることを関係機関で共有。</p> <p>在宅サービスの導入を提案することとなった。園の入所順位の調整を依頼。</p> <p>生活介護事業所の見学を実施。</p>
12月	短期入所再開（月1回）	<p>家族からの希望により、園の短期入所の利用再開</p> <p>兄弟の支援を検討するために、関係者で会議を実施。</p>
R3年 9月	兄死亡	
R3年 11月	短期入所（月2回）	<p>「兄がいなくなっても、本人の大変さは変わらない。短期入所の利用をコロナ前の月二回にしてもらえないか」と話があり、同年11月から月二回（一泊二日）の利用再開（令和6年5月まで実施）。</p>
R4年 3月	精神科病院へ入院（1か月）	<p>家庭での特性行動が顕著になり精神科病院へ入院。</p> <p>入院後の状態は落ち着いている。</p>
R4年 10月	ケース会議	<p>入所：園の入所待機者となっているが、新規入所を不適切事案の発生により停止していることから、入所の見込みは立たず。父母は自宅で見たい気持ち強いが、母の体調が悪く、父が限界に達したら自宅での生活は難しいとの見立て。</p> <p>短期入所：園は月2回（1泊2日）、短期事業所は月2回（2泊3日）を継続するが、感染症の影響により実施できない時期あり。短期入所の利用増加を検討するが、体制上の理由からできず。</p> <p>日中生活：生活介護事業所の利用を検討するが、元利用者は新規場面に弱く不安定になり、在宅での父母の負担が増すことから、慎重に検討する必要があることを確認。</p>
R5年 4月	家族からの訴え③	<p>相談支援事業所ういずから園に「父から『そろそろ限界だ、入所できる施設を探して欲しい』と話があり、園の状況を確認したい」と連絡がある。園は虐待等不適切な支援の改善中のため新規入所は停止中であることを説明し、入所調整会議は行われてない。</p>
5月	家族からの訴え④	<p>上記と同様の訴えが父から園にあるが、上記と同様に入所調整会議は行われていない。以降、相談支援事業所ういずが他の県立施設を含めた入所先を探す。</p>

6月	せいしんか びょういん 精神科 病院 へ入院（1 か月）	みんざい あら しょうほう ほんにんねむ 「眠剤が新たに処方されたものの、本人眠らない」といった ほんにん かていせいかつ じょうきょう ふくやくちょうせい ちち 本人の家庭生活の状況から、服薬調整と父のレスパイト のため入院。
		えん たんきにゆうしりょうかいしじ こ 園は短期入所利用開始時に、37.0を超えている場合には、 たんきりょう ことわ ちち くるま こお じょうきょう 短期利用を断る。父の車のクーラーが壊れている状況 があってもたいおう かわら ず。
8月	かぞく 家族からの うった 訴え⑤	はは そうだんしえんじぎょうしよ れんらく なか しんがた 母から相談支援事業所ういずへの連絡の中で、新型コロナ ウイルス感染症の発生により短期入所が断られたが、 ほんとう うたが たんきにゆうしよ はつねつ ことわ 本当のことか疑っている。短期入所が発熱により断られ るため、ちち ひへい はなし 父が疲弊しているとの話あり。
	ぎやくたい じょうほう 虐待 情報 ⑧	にゆうしよしせつ けんがくじ まんが しゅうちやく もとりようしや たい 入所施設の見学時に漫画に執着した元利用者に対して ちち ほほ そうだんしえんじぎょうしよ おだわらし 父が頬をたたいたため、相談支援事業所ういずが小田原市 へ報告。見学を実施した施設は、元利用者の特性には合わない とのことで、にゆうしよわく あ にゆうしよ 入所枠に空きができたが入所できず。
9月	ぎやくたい じょうほう 虐待 情報 ⑨	こ 37.0を超えていたことから、園は短期入所の利用を断る。 えんしよくいん まえ しょうす ちち ほんにん ほほ 園職員の前でイライラした様子があった父が本人の頬を はたく。小田原市に状況を報告。母の持病が悪化し、父の ふたん ふ ちち けんない しせつ にゆうしよ 負担が増えていること、父は、県内の施設での入所ができ なければ、田舎（ゆっくりでき、本人が荒れても大丈夫な ばしょ）への引っ越しをかんが ていることをかんけいきかん きょうゆう 場所）へ検討していることを関係機関で共有。
		そうだんしえんじぎょうしよ かていほうもんじ ちち おだ しょうす 相談支援事業所ういずの家庭訪問時には父は穏やかな様子 あり、もとりようしや おお ちつ す ちち せつぱく かいけつ 元利用者も落ち着いて過ごしていた。父の切迫を解決 するためのたいおう けんとう 対応を検討していく。
		せり や えん にゆうしよ おだわらし おこな 芹が谷やまゆり園に入所のエントリーを小田原市から行 う。これまでの父からの虐待に関しても記載した上で申し こ だんだが、にゆうしよ いた 込んだが、入所に至らなかった。
10月	せいしんか にゆういん 精神科 入院 きぼう ことわ 希望を断ら れる	
	たんき にゆうしよ 短期 入所 りようちゆう 利用中 の しょうす 様子	もとりようしや しょうす おお ちつ えん たんきにゆうしりょう とちゅう 元利用者の様子が落ち着かず、園の短期入所利用を途中で ちゅうし 中止。
R6年 2月		たいげんにゆうきょ グループホームへ体験入居をしたが、マンツーマン対応が ひつよう 必要であり、グループホームの職員配置では受入れに至ら ず。
R6年 5月	えん たんき 園の 短期 にゆうしよ 入所を	えん たんきりょうちゅう じしやこうい しゅつけつ じゅしん ひつよう 園を短期利用中、自傷行為により出血があり、受診の必要 があつたため、ちち はや むか く いらい 父に早めに迎えに来るよう依頼。

	りようちゆう 利用中 の しゅっけつ 出血により そうき 早期にお迎 え	
5月 が	ちばけん 千葉県 ちようせいむら 長生村 へ てんきよ 転居	てんきよ む かんけいきかんかいぎ じっし 転居に向けた関係機関会議を実施 そうだんしえんじぎようしよ ちようせいむら じぜん じようほうきようゆう 相談支援事業所ういずが長生村へ事前に情報共有し、 おだわらし ひきつ じっし 小田原市からも引継ぎを実施した。
R6年 7月4日 ねん がつ にち	ほんじあん 本事案 の はっせい 発生	
R7年 3月12日 ねん がつ にち	ちちこうはんけっしん 父公判結審	ち ば ちほうさいばんしよ ちち たい ちようえき ねん しつこうゆうよ ねん 千葉地方裁判所にて、父に対し懲役3年、執行猶予5年の さいけつ 裁決が出る。